

## プロフェッショナル養成への挑戦 昭和式技術能力の確立 臨地実習後における4日間のOSCEを実施する意義

香取尚美 山田洋之 望月泰男 大西英文  
(昭和医療技術専門学校)

Key words : 改良 OSCE、昭和式技術能力、臨地実習との連携

【はじめに】第1回日本臨床検査学教育学会において、臨地実習直後、卒業レベルの基本的技能を評価するための客観的検査技術能力試験(以下OSCE)を導入する必要性を唱えた。この試みは検討段階を含め5年が経過し、形成的評価を行うことで改善を重ねてきた。将来、安全な医療を提供できる検査技師を育成するために、今回、従来の基本的技術内容を再検討した。検査全般の技術レベルを明確にすることで、昭和式技術能力を確立した。

【対象及び方法】平成19年度本校3年生80名、OSCE実施日は平成19年10月3日から6日の4日間実施する。試験日程と内容は、第1日目：細菌同定・培地作成、スライド試験(病理・血液・微生物・尿沈渣)、第2日目：ABO式血液型判定・交差適合試験、第3日目：HE染色、尿沈渣標本作製、第4日目：血算・ヘマトクリット、心電図検査を行う。試験時間は、は40分、は30分とし、グループ班は6~8名(スライド試験を除く)に分け、時間帯をシフトしながら、10回又は13回実施する。のスライド試験では、各部門10題出題(組織標本より臓器名と染色名を判読、正常末梢血細胞の判定等、平板培地より菌種の同定等、尿正常細胞の判読等)する。実技では、バイオセーフティ、血液寒天培地作成、培養操作等を実施する。では3検体をオモテ試験とウラ試験、交差適合試験(生理食塩水・プロメリン法)を行い適合血を選択する。では染色操作のスムーズ性・

美しい標本等、一連の沈渣作製手技、顕微鏡の取扱い・観察等を行う。の白血球算定では分注・ニュートンリング・視野確認・算出等又、心電図検査では、模擬患者役の氏名確認・検査説明・測定等を実施する。試験終了後、学生へのアンケート調査並びに担当教員への対面式聞き取り調査を行う。実技試験の評価は段階別評価法を用いる。

【結果】それぞれの平均点は、のスライド試験66.9点、細菌検査83.1点、血液型判定・交差適合試験87.0点、のHE染色78.1点、尿沈渣88.1点、の血算・ヘマトクリット81.6点、心電図男子75.9点、女子88.4点であった。特に、アンケート調査では、スライド試験について8割の学生が難しいと回答した。又、昨年度より大幅にOSCE内容を増やしたことについて意見を求めると、7割の学生が肯定的な考えであった。同時に、多くの学生から臨地実習の日々の取り組む姿勢の重要性が唱えられた。

【考察】安全な医療を提供する為には、ある一定の知識・技能の水準が求められる。国家試験では、技術能力を計ることは困難であり、卒業レベルでの格差が指摘されている。今回、検査の専門家として、第一歩を踏み出すにあたり、OSCE内容を改良したことで、学生の弱点の克服、意識の向上、後輩への伝承(技術の大切さ)、臨地実習の意義等に良い影響を与えている。昭和式技術能力の定着こそが学校への信頼と医療の安全に寄与すると考える。